

平成 21 年  
5 月 28 日

# 病害虫発生予報 6 月号

茨城県病害虫防除所  
茨城県植物防疫協会

全ての農作物に残留農薬基準が設定されています！！

薬剤散布の際は周辺作物へ飛散しないよう十分注意しましょう

## < 目 次 >

### ・ 今月の予報

#### 【注意すべき病害虫】

水稲：いもち病(葉いもち), イネドロオイムシ	1
ナシ：黒星病, ナシヒメシンクイ, カメムシ類(越冬世代)	2
夏ネギ：べと病, さび病	3
小麦：赤かび病	3

#### 【その他の病害虫】

水稲, ナシ, ブドウ, カキ, 夏ネギ, 半促成ピーマン, 抑制トマト

### ・ 病害虫ミニ情報

ネギべと病について	5
-----------	---

### ・ 今月の気象予報

6

### ・ テレホンサービス

6

029(226)5321

農薬登録速報については, 農林水産省ホームページ「農薬コーナー」  
<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html> 内の登録速報を参照してください。

水田において農薬を使用するときは, 農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等  
を確認するとともに, 止水期間を1週間程度とすること。

詳しくは, 病害虫防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445

予報内容は, ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス <http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/>

・今月の予報

【注意すべき病害虫】

水 稲

1．いもち病（葉いもち）

[ 予報内容 ]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[ 予報の根拠 ]

5月下旬現在、置苗でのいもち病の発生は、例年どおり認められない。  
気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か少ないと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

発生好適条件：気温 20～25 で、弱い雨や霧などが続いてイネの葉が長時間ぬれるような条件のとき。一般的に6月の高温多湿、7～8月の低温多雨は発生を助長する。

[ 防除上注意すべき事項 ]

**置苗はいもち病の発生源となるため、速やかに本田から持ち出して埋める等処分する。**  
常発地で、育苗箱施用剤を使用していない水田では、特に発生に注意する。  
例年6月下旬から発生するので、粒剤で本田防除する場合には早めに防除する。  
粒剤の施用時期と中干しの時期が重なる場合には、中干し後に必ず湛水状態にしてから粒剤を散布する。  
中干し等の栽培管理を徹底し、イネの健全育成につとめる。

水田において農薬を使用するときは、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間は1週間程度とすること。

2．イネドロオイムシ

[ 予報内容 ]

発生時期	発 生 量	発生地域
早い	平年並	県下全域

[ 予報の根拠 ]

4月以降気温が高めに経過しており、越冬成虫の水田への侵入時期は平年より早かった。  
5月下旬現在、越冬成虫の発生量およびイネへの産卵数は平年並である。  
気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か低く、降水量は平年並か少ないと予想され、特に発生を助長する条件ではない。

[ 防除上注意すべき事項 ]

育苗箱施用剤を使用していない水田では、曇雨天が続く場合は注意が必要である。また、霧が発生する地域等では発生が多い傾向がある。  
長期に曇雨天が続く場合は、育苗箱施用剤を使用している場合でも、6月中旬以降に発生が多くなる可能性がある。  
例年の発生推移としては、幼虫が6月上旬頃から発生し、6月下旬に被害が最も多くなる。7月上旬には終息するが、幼虫の発生が多く、食害が目立つ場合は防除を行う。

ナ シ

1. 黒星病

[ 予報内容 ]

発生時期	発 生 量	発生地域
-	やや多い~多い	県下全域

[ 予報の根拠 ]

5月下旬現在、発病葉率は平年より高く、発病果率は平年よりやや高い。

[ 防除上注意すべき事項 ]

発病した果そう基部、葉及び果実は二次伝染源となるため、見つけ次第除去し、土中深く埋める。

圃場により発病程度の差が大きいため、園内を良く観察し、発病が確認された圃場では、発病果そう、葉及び幼果を除去した後に薬剤防除を行う。薬剤散布量は、10a 当たり 300 リットルを目安にし、丁寧に散布する。

薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

2. ナシヒメシンクイ

[ 予報内容 ]

発生時期	発 生 量	発生地域
やや早い	やや多い	県下全域

[ 予報の根拠 ]

フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺時期はやや早く、誘殺数は平年よりやや多かった。

[ 防除上注意すべき事項 ]

今後、次世代成虫の発生が早いと予想されるため、参考防除例に従って防除を徹底する。

薬剤散布量は、10a 当たり 300 リットルを目安にし、丁寧に散布する。

3. カメムシ類（越冬世代）

[ 予報内容 ]

発生時期	発 生 量	発生地域
平年並	平年並~やや多い	県下全域

[ 予報の根拠 ]

5月下旬現在、果樹園に設置した予察灯（笠間市、かすみがうら市）へのチャバネアオカメムシの誘殺数は平年並である。

サクラのたたき落とし調査では、チャバネアオカメムシの発生は平年並~やや多い。

[ 防除上注意すべき事項 ]

夜間の気温が高いと活動が活発になる。このような場合は果樹園への飛来にも十分注意する。防除は、カメムシ類の活動が鈍い早朝に行う。

多目的防災網（6mm及び9mmクロス目以下）を張ると防除対策として有効である。

## 夏ネギ

### 1. ベと病

#### [ 予報内容 ]

発生時期	発生量	発生地域
早い	多い	県下全域

#### [ 予報の根拠 ]

5月下旬現在、発病度及び発生地点率は平年より高い。  
気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か低く、6月第2半句以降は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想され、発生を助長する条件である。

#### [ 防除上注意すべき事項 ]

前年発生が多く見られた圃場は発病状況に注意し、発病が見られたらただちに防除を行う。  
発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて追加防除を行う。  
薬剤散布は展着剤を加用し丁寧に行う。また、薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。

(平成21年5月26日発表の病害虫発生予察注意報第1号、本報P.5病害虫ミニ情報 参照)

### 2. さび病

#### [ 予報内容 ]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

#### [ 予報の根拠 ]

5月下旬現在、発病度は平年並だが発生地点率は平年よりやや高い。  
気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か低く、6月第2半句以降は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想され、発生を助長する条件である。

#### [ 防除上注意すべき事項 ]

前年発生が多く見られた圃場は発病状況に注意し、発病が見られたらただちに防除を行う。  
発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて追加防除を行う。  
薬剤散布は展着剤を加用し丁寧に行う。また、薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意する。

## 小麦の赤かび病について

～ 赤かび病粒の混入を防止し、高品質麦の生産につとめましょう！！～

収穫が遅れると、赤かび粒から健全粒へと感染が広がるおそれがあるため、適期収穫につとめる。

収穫時には、赤かび病が発生しているほ場は刈り分け、赤かび粒が混入しないように十分注意する。

収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。小麦の調製をする際に、グレーダー網目を基準より大きく(2.4mm以上)すると、赤かび粒の混入を軽減できる。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネミズゾウムシ	発生量：平年並	湛水状態は成・幼虫の活動に好適なため、適切な水管理をしてイネの健全育成につとめる。
ナシ	アブラムシ類	発生量：平年並	5月下旬現在，平年並の発生である。
	ハダニ類	発生量：平年並	5月下旬現在，発生は認められない。
ブドウ	灰色かび病	発生量：平年並	5月下旬現在，発生は認められない。
	べと病	発生量：平年並	5月下旬現在，発生は認められない。
カキ	炭そ病	発生量：平年並	5月下旬現在，発生は認められない。
	カキクダアザミウマ	発生量：平年並	5月下旬現在，発生は認められない。
夏ネギ	黒斑病	発生量：平年並	5月下旬現在，平年並の発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：やや多い	5月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや多い	5月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
半促成 ピーマン	アザミウマ類	平年並～やや多い	5月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
抑制 トマト	黄化葉巻病	-	育苗ハウスは開口部に0.4mm目合い以下の防虫ネットを設置し，育苗時か定植時に粒剤を施用する等，媒介虫のタバココナジラミの防除を徹底する。

施設野菜の栽培終了後の管理について

コナジラミ類，アブラムシ類は，各種ウイルス病を媒介するのでハウス外への飛散や，次作への持ち込みを防止するため，株元を切断し1～2週間程度ハウスを密閉する蒸し込みを行う。蒸し込み終了後は，作物残さのハウス外への持ち出しを徹底し，罹病残さからの各種病害の伝染を防止する。

## ネギベと病について

ネギベと病は、ここ数年発生が多く問題となっています。作型では、夏どり栽培、夏秋どり栽培、秋冬どり栽培のいずれの作型においても発生しますが、特に夏～秋に収穫するネギで被害が多くなっています。本年は5月下旬の調査で、平年に比べ多い発生となっており、また梅雨期は発病好適条件になりますので、今後の発生に十分注意して下さい。

### 【病徴と伝染経路】

春や秋に感染したネギ葉は、はじめ輪郭がはっきりしない長楕円形で、薄緑色のぼんやりとした病斑となります。その表面に生じた白色のかびは、間もなく色が濃くなって紫黒色となります。病勢が進むと病斑は黄化して枯死します。

ネギベと病菌は、卵孢子や菌糸の状態では被害植物上で越冬し、気温の上昇とともに分生子を形成します。分生子は、周囲の株に飛散してさらに病害を拡大させます。

### 【発生しやすい条件】

一般的に平均気温が15～20℃で、降雨が続くと多発生する傾向がありますので、春先に気温が高く降雨が多い場合や、梅雨や秋の長雨の期間が冷涼で曇雨天が続く場合には発生が多くなります。

またネギベと病菌は、圃場に残っている株や被害残渣上で越冬しますので、前年に発生が多かった圃場では特に注意が必要です。

茨城県の夏ネギでは、例年、6月に最も被害が多くなっています(図1)。また2007年から2年間、多発生が続きましたので(図2)、今後の発生には十分注意が必要です。

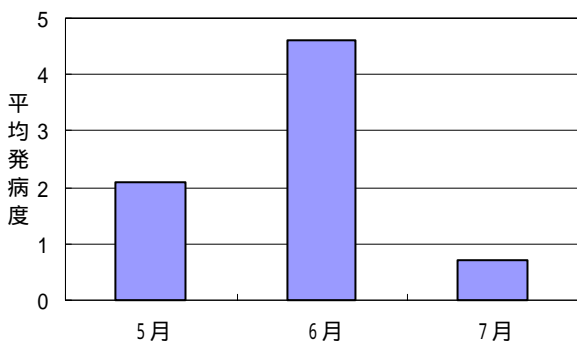


図1 過去10年間におけるネギベと病の発病の推移

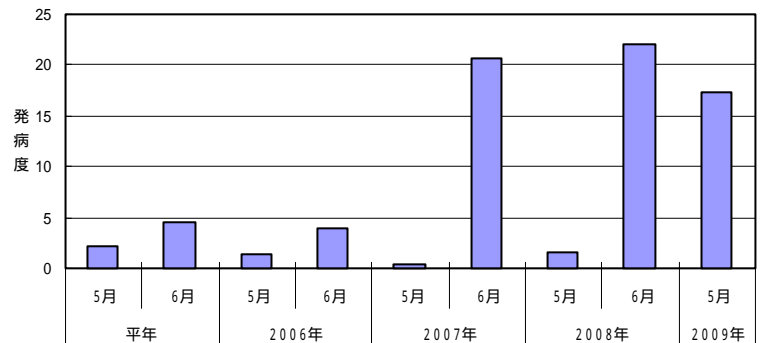


図2 過去3年間の5、6月のネギベと病の発病度

発病度：25株中の発病の有無を調査し、葉の病斑面積から次式によって算出した値

$$\text{発病度} = ((4A + 3B + 2C + D) / 4 \times \text{調査株数}) \times 100$$

A：全葉面積の31%以上に病斑が認められる。 C：全葉面積の11～20%に病斑が認められる。

B：全葉面積の21～30%に病斑が認められる。 D：全葉面積の1～10%に病斑が認められる。

### 【防除対策】

多湿条件は発生を助長するので、圃場の排水対策をしっかりと行って下さい。

肥料切れや多肥栽培を避け、適正な肥培管理を行なって下さい。

薬剤散布は展着剤を加用し、葉身にしっかりとかかるように丁寧に行って下さい。また薬剤を散布する際は、収穫前日数に十分注意して下さい。

薬剤散布後は防除効果を確認し、効果が得られない場合は、追加して散布することになります。その場合は他系統の薬剤を使用し、ローテーション散布を心がけて下さい。

被害残渣は翌年の伝染源となるので圃場内に放置せず、圃場から持ち出し適切に処分して下さい。

・ 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 5月23日から6月22日)

気象庁(5月22日 発表)

< 向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率(%) >

[ 確率 ]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	40	40	20
降水量	関東甲信全域	40	40	20
日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[ 概要 ]

天気は数日の周期で変わるでしょう。後半は平年と同様に曇や雨の日が多い見込みです。

< 1週目の予報 > 5月23日(土曜日)から5月29日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

< 2週目の予報 > 5月30日(土曜日)から6月5日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率 60%

< 3週目から4週目の予報 > 6月6日(土曜日)から6月19日(金曜日)

気温 関東甲信地方 低い確率 60%

・ テレホンサービス

下記の情報を24時間提供しています。リアルタイムな情報を提供するために、病害虫の発生状況等によっては内容を変更することがあります。

電話番号 : 029 ( 226 ) 5321

6月上旬 果樹および露地野菜の病害虫防除対策について

6月下旬 水稲および果樹の病害虫防除対策について

**農薬を使用する際は**

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。